

小学校低学年「マットを使った運動遊び」 における学習指導と学習評価モデルの提案

後藤 大輔*¹

要 旨

現在の学習指導要領では、各教科において育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力、表現力、判断力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で示されており、教員はこの3つの柱を踏まえたうえで学習指導と学習評価のつながりを意識して指導計画を構想していくことが重要である。また、評価ののち改善を図っていくことを通じて、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことが望まれる。本研究では、筆者が行った教材開発に関する先行研究をもとに、単元の評価基準および全5時間からなる単元における指導と評価の計画、そして2時間目の授業内容である「前転がり」の板書計画および展開の構想案を作成することで「マットを使った運動遊び」における学習指導と学習評価モデルを提案することを目的とした。考察の結果、本研究における学習指導と学習評価モデルの妥当性が示唆された。

Keywords : 学習指導と学習評価, 小学校, 体育, マットを使った運動遊び
guidance and evaluation, elementary school, physical education, floor exercises

1. はじめに

現在の学習指導要領では、各教科において育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力、表現力、判断力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で示されており、教員がこれらを子ども達の学習成果から明確に捉え、適切な評価を行うことが求められる¹⁾。さらに、評価ののち改善を図っていくことを通じて、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」についての内容が指導要領内に記載されており、その重要性が示されている¹⁾。中央教育審議会²⁾においても、平成31年に「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」が提示され、学習指導と学習評価は学校の教育活動の根幹であり、カリキュラム・マネジメントの中核的な役割を担っていると明文化されている。このような指導と評価の一体化を図る方針においては、文部科学省・国立教育政策研究所³⁾からも「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料」が発行されている。これらの背景から、近年では各教科において指導と評価のつながりを意識した先行研究⁴⁾⁵⁾は数多くみられ、小学校体育においては児童の思考力・判断力を高める観点から「指導と評価の一体化」を図る学習指導計画を開発し、その効果について検討した研究⁶⁾や、授業を受けた児童の授業評価と学習内容の関連性についての研究⁷⁾などがみられる。また、器械運動領域については、マット運動の授業について指導と評価の観点から指導計画を示した先行研究⁸⁾や、思考力・判断力・表現力を育てるためにICTを活用し

*1 川崎医療福祉大学 総合教育センター

た授業実践に関する報告⁹⁾など、全体的な指導計画および学習評価に関する内容から具体的な学習指導に関する内容に至るまで様々な先行研究がみられる。

このように、学習指導要領改訂によって指導と評価の一体化が重要視されており、先行研究も多く見受けられることから、小学校体育において教員が単元計画や授業内容を構想していく際は、指導と評価の一体化の観点を含めて取り組んでいくことが重要であると考えられる。特に体育は運動学習が中心であるため、児童が運動に取り組む姿を中心に捉えていくこととなる。よって、教員側が学習指導要領をもとに設定した適切な評価基準に則って授業を進め、児童が運動学習に臨む様子を観察しつつ学習評価を行っていくことが望ましいと考える。

そこで本研究では、筆者が行った教材開発に関する先行研究¹⁰⁾をもとに指導内容と学習評価モデルを作成し、学習評価に関する参考資料および先行研究に基づいて考察を行ったので報告する。

2. 方法

筆者が行った教材開発に関する先行研究をもとに、単元の評価基準および全5時間からなる単元における指導と評価の計画を作成した(図1~2参照)。また2時間目の「前転がり」について、実際の板書計画および展開の構想案を作成した(図3~4参照)

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①マットを使った運動遊びについて、実際に動いたり、動き方を伝えたりできる。	①よび技の大切さを理解し、ころがる遊びに進んで取り組んでいる。	①順番や決まりを正しく守って運動遊びに取り組もうとしている。
②場の環境設定に合わせてうまく転がって遊ぶことができる。	②複数ある場の設定の中から自ら選択して取り組んでいる。	②場の準備や片付けを協力して積極的にしようとしている。
③マットに背中をつけて、いろいろな方向に転がって遊ぶことができる。	③友達の良い動きを見付けたり、うまく行うためのやり方やポイントを友達に伝えている。	③自ら進んで運動遊びに取り組み、仲間とともに仲良く運動しようとしている。

図1 単元の評価基準

時間	1	2	3	4	5
主題	マット遊び	前転がり遊び	後転がり遊び	びよんびよん遊び	転がる動きを組み合わせて遊ぼう
主な内容等	<ul style="list-style-type: none"> 動物歩き(ライオン) 動物歩き(うさぎ) 生き物歩き(カニ) 生き物歩き(クモ) 丸太転がり <ul style="list-style-type: none"> ○1人で ○2人で 	<ul style="list-style-type: none"> ゆりかご ロケットのポーズ(背倒立) 大きなゆりかご 前転がり <ul style="list-style-type: none"> ○ころりんコース(高低差) ○さかみちコース(傾斜) ○たいらコース(通常) 	<ul style="list-style-type: none"> ゆりかご 鋤(すき)のポーズ 小さなゆりかご 後転がり <ul style="list-style-type: none"> ○さかみちコース(傾斜) ○ふわふわコース(マット2枚) ○たいらコース(通常) 	<ul style="list-style-type: none"> カエルの足打ち カエルの逆立ち 壁登り逆立ち 支持での川跳び <ul style="list-style-type: none"> ○かわコース(近距離) ○いけコース(中距離) ○みずうみコース(遠距離) 	<ul style="list-style-type: none"> 丸太転がり 前転がり 後転がり 支持での川跳び <ul style="list-style-type: none"> ○らくらくコース(初級) ○うきうきコース(中級) ○わくわくコース(上級)
知	① 観察		② 観察		③ 観察・まとめカード
思		① 観察		② 観察	③ 観察・まとめカード
態		① 観察	② 観察	③ 観察	

※知は「知識・技能」、思は「思考・判断・表現」、態は「主体的に取り組む態度」を示す。

図2 単元における指導と評価の計画(5時間)



図3 板書計画(2時間目の例)

分	●学習内容・活動(・予想される児童の反応)	指導上の留意点(○指導 □支援・配慮 ◇評価基準)
導入 5分	●場の準備 ・グループごとに配置図を見て確認する。 ・グループで協力して用具を運ぶ。	○割り当てたグループでマットを運んだり、踏切版を運んだりできるようにする。
	●本時の学習内容の確認 ・板書を見ながら説明を聞く。	
2分	●準備体操(ストレッチ) ・教員の指示に沿って準備体操をする。	□転がる動きに関連する部位を説明しながらストレッチをする。
3分	●転がる遊びをしてみよう ・各々でゆりかご、ロケットのポーズ、大きなゆりかごをする。 ・周囲の児童と動きを確認し合いながら行う。	○板書をもとに3つの転がる遊びについて説明し、教員が見本を行いながら順番に取り組む。 □うまくできない児童にはポイントを板書とともに示し、口頭でも伝える。 ◇よび技の大切さを理解し、ころがる遊びに進んで取り組もうとしている。
展開 8分	●前転がり遊びをやってみよう めあて:いろいろなマットで、まえころがりあそびをやってみよう ・板書を見ながら教員の説明を聴く。	○本時のめあてを示す。 □3つの異なる場の設定について、板書を用いて説明した後に活動に移る。また、活動時間内は好きなコースで行って良いが、すべてのコースを最低1回ずつは経験することを促す。
12分	・3つのコースの中から好きな場で前転がりをして遊ぶ。	○児童に助言をする。 ○友達の動きをよく観察し、児童同士で褒めたりアドバイスしたりするよう促す。 □苦手な子、動きが理解できていない児童にはICTを活用しながら動きが理解できるように促す。 ◇順番や決まりを正しく守って運動遊びに取り組もうとしている。
5分	●発表 ・拳手をしてみんなの前で発表をする。 ・好きなコースを選んで前転がりを行う。	○3つのコースからそれぞれ2人程度発表をしてもらう。 ○どこが良かったかを見ている児童にも伝える。 □手が上がらない児童には、発表を行った児童のどこが良いと思ったかを発言してもらうよう促す。
まとめ 5分	●本時の振り返りとまとめ ・活動の振り返りをする。 まとめ:すこしたかいところや、くだりざかからまえころがりをする、じょうずにころがることことができる。	○児童数名に3つのコースを行ってみてどうだったか感想を発表してもらう。 ○本時のまとめを示す。
5分	●場の片付け ・グループで協力して用具を運ぶ。	○割り当てたグループでマットを運んだり、踏切版を運んだりできるようにする。

図4 展開の構想案(2時間目の例)

3. 考察

小学校学習指導要領解説体育編¹⁾では、単元の目標として(1)知識及び技能では「マットを使った運動遊びでは、いろいろな方向への転がり、手で支えての体の保持や回転をすること」、(2)思考・判断・表現力では「器械・器具を用いた簡単な遊び方を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えること」、(3)学びに向かう力、人間性等では「運動遊びに進んで取り組み、順番や決まりを守り誰とでも仲良く運動をしたり、場や器械・器具の安全に気を付けたりすること」としており、これらを踏まえて単元の評価基準および単元における指導と評価の計画(5時間)を作成した(図1~2参照)。まず(1)知識及び技能について、技や動作が「できる」といった観点からの評価は含めていない。これは高橋ら¹¹⁾が「単に『できる・できない』を課題にするのではなく、できばえ(合理的な動き、運動の雄大さ、美しさ)が理解でき、できばえに挑戦し、これを達成した楽しさや喜びを味わえるように指導する」と指摘していることから、技や動作の可否そのものを評価するのではなく、課題に挑戦する姿勢や運動遊びそのものに主体的に取り組む態度を評価していくことが重要で

あると考える。また、(2) 思考・判断・表現力については、三木¹²⁾が「運動の行い方や練習の仕方、活動の仕方など科学的な知識によって合理的な解決に向けて試行し判断することが求められている」と述べており、本研究においても取り組む技に類似した動きである「よび技」を導入として設定したり、段階的指導として複数の場の設定を設けた。これらを通して、思考・判断・表現力を適切な評価していくことが可能になると考える。また、福岡市教育センター⁹⁾が行った先行研究によれば、小学校第6学年を対象としたマット運動の授業においてタブレット機器を活用した結果、「行った動きをすぐ見てふりかえる」ことに使っていた児童が多く、タブレットの即時性が思考・判断・表現力を育てるために最も有効であったと述べている。筆者が行った教材開発においても、タブレットの活用を教材の1つとして取り入れており、映像遅延アプリを用いて自分が行った動きを確認することや見本動画を視聴できることを各授業の活動にて設定している。よって、児童がICTを活用しながら学習に取り組む様子を教員が観察することで、思考・判断・表現力を評価していくことができるものと考えられる。(3) 学びに向かう力、人間性等については、森田ら¹³⁾の先行研究によれば、「課題解決サイクル」を自ら循環させることのできる児童は「学びに向かう力、人間性等」が涵養されているという傾向が見られたと報告している。課題解決サイクルとは「計画－実行－振り返り」から成り立つPDCAサイクルと似た進め方であるが、課題解決サイクルでは「実行」の過程にて、一緒に取り組む児童に動きを見てもらったり、アドバイスしてもらったりすることが含まれる。筆者が行った教材開発でも、2時間目の例の展開において、「友達の動きをよく観察し、児童同士で褒めたりアドバイスしたりするよう促す」ことを教員側の指導として設定している(図4参照)。よって、児童同士の関わり合いを積極的に促していくことで、児童の様子を客観的に捉え(3) 学びに向かう力、人間性等を評価していくことができると考える。

4. 結論

本研究では、筆者が行った教材開発に関する先行研究をもとに、単元の評価基準および全5時間からなる単元における指導と評価の計画、そして2時間目「前転がり」の板書計画および展開の構想案を作成し、学習指導と学習評価モデルの提案を行った。学習評価に関する参考資料および先行研究に基づいた考察の結果、本研究における学習指導と学習評価モデルの妥当性が示唆された。

5. 今後の課題

本研究は、筆者の教材開発に関する先行研究をもとに学習指導と学習評価モデルの提案を行ったが、実際に本研究に基づいて授業を行い、その有効性や効果について検討することは残念ながら出来ておらず、課題が残る。これについては今後の研究課題とし、本研究を基盤としてより実践的な研究に取り組んでいく必要があると考える。本研究がマット運動遊びの授業を構想していく際の参考資料になることを期待するとともに、小学校教員の授業

設計力向上の一助となれば幸いである。

文 献

- 1) 文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領解説体育編」文部科学省, p.17, pp.45-47, p.80.
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 (2019) 「児童生徒の学習評価の在り方について」 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415602_1_1_1.pdf.
- 3) 文部科学省国立教育政策研究所教職課程研究センター (2020) 「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料」文部科学省, pp.1-36.
- 4) 栢野彰秀・山代佳菜・美森健一郎 (2016) 「指導」と「評価」を一体化させた小学校理科授業の実際: 第3学年「電気の通り道」単元を例として」島根大学教育臨床総合研究 15, pp.141-151.
- 5) 小原友行・日高悠子・大久保智加 (2011) 「小学校における指導と一体化した評価問題の開発: 国語科・社会科を事例として」学校教育実践学研究 17, pp.101-108.
- 6) 南島永衣子・大友智・梅垣明美・築田尚晃・深田直宏・上田憲嗣・吉井健人・友草司 (2016) 「小学校体育授業における「指導と評価の一体化」を図る学習指導計画の開発とその効果の検討: 思考力・判断力を高める学習指導の事例的検討」立命館教職教育研究 3, pp.31-41.
- 7) 三田沙織・奥平勝一・江藤真生子・村井梨沙子 (2021) 「体育授業における小学校高学年を対象としたボール運動指導に関する研究: 児童による授業評価を手がかりとして」琉球大学教育学部紀要 (99), pp.153-160.
- 8) 松本格之祐 (2013) 「小学校の器械運動 (マット運動) の授業づくりにおける「指導と評価」の計画と具体」体育科教育学研究 29 (1), pp.67-72.
- 9) 福岡市教育センター体育・保健体育科研究室 (2017) 「思考力・判断力・表現力を育てる器械運動の学習指導 ―交流活動における思考ツールと ICT 機器の活用を通して―」福岡市教育センター平成 29 年度研究報告書, pp.1-12.
- 10) 後藤大輔 (2023) 「自閉スペクトラム症児がいる小学校通常級を想定したマット運動教材の提案 ―TEACCH の視点に焦点を当てて―」川崎医療福祉学会誌 33 補冊号, 川崎医療福祉学会, pp.135-142.
- 11) 高橋健夫・三木四郎・長野淳次郎・三上肇 (1992) 「器械運動の授業づくり」大修館書店, p13.
- 12) 三木四郎 (2020) 「体育で育てる資質・能力と運動学習の意義を問う」伝承 19, pp.1-14.
- 13) 森田哲史・佐藤哲史・柳田信也 (2022) 「小学校体育科における「学びに向かう力, 人間性等」の涵養を目指した指導法の開発 ―自己調整学習の形成を意図した第5学年「体づくり運動」の実践を通して―」埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 20, pp.49-55.